

市長賞

臼井 杏純(うすい あずみ) 第一中 2年生

作品名:ある晴れた夏の朝

図書:ある晴れた夏の朝

戦争とは、何のためにあるのだろう。そんなことをよく考えていた私にとって、この本は、自分の考え方を大きく変えてくれた一冊だった。

この本には、日本への原爆投下の是非を論じるアメリカの高校生八人が描かれている。原爆肯定派、否定派に四人ずつ分かれ、討論会を通して「戦争と平和」について考えていく物語だ。主人公は、否定派の日系アメリカ人であるメイ。その他のメンバーも、アイルランド系、中国系、ユダヤ系、アフリカ系など、さまざまだ。今まで私は、原爆を肯定することなど考えたこともなかった。原爆投下によって、たくさんの罪のない人々が犠牲になった。日本は何もしていないのに。そんな事しか考えていなかった。それは自分が日本国民だからということもあるが、なにより、日本という被爆国側の視点でしか見ていなかったからだと思う。そんな自分の考えは間違えていたと、この本が気づかせてくれた。この物語を読んで、原爆と戦争について、さまざまな角度から考えることができた。肯定派の主張からも、否定派の主張からも、私の知らなかった事実がたくさん出てきた。太平洋戦争は日本軍による真珠湾攻撃によって始まったこと、南京虐殺によって日本兵がたくさんの罪のない中国人を殺したこと、知れば知るほど肯定派の意見も納得せざるを得なくなった。

「目には目を、歯には歯を、という考え方を持っているかぎり、人類に平和は訪れない。」これは、否定派の主張の一部であり、一番印象に残った場面だ。「目には目を、歯には歯を」とは、人が誰かを傷つけた場合、その罰は同程度のものでなければならないという意味だ。つまり、この場面で否定派のメンバーは、「日本軍が侵略してきたから原爆を落としてもよかったという考えは成り立たない。」ということをお伝えしたのだと思う。そう解釈したとき、私の心は大きく動いた。なぜなら私は、今まで、「目には目を、歯には歯を」というまさにそんな考え方をしてきたからだ。「誰かに傷つけられたら、その分相手を傷つけてもいい」という考え方をずっと信じていた自分が、とても情けなく思えた。実際に誰かに傷つけられたときに、

その分相手を傷つけてしまったこともあった。「平和」は、お互いに相手のことを理解しあい、尊重しあうことができたときに、初めて創造できるものだと思う。第二次世界大戦も、お互いに相手のことを尊重できなかったために起こったと言っても過言ではない。戦争中、憎悪で偏見とも言える、「人種差別」によって犠牲になった人もたくさんいる。今も、この世界のどこかで差別に苦しんでいる人がいる。人種差別がない世の中にするため、まずは相手のことを理解することが一番の近道だと私は思う。感じ方や性格、人種、民族、宗教などを含めて、人と人は異なっている。異なっているからこそ、人間というのはおもしろいし、私たちはその差異を受け入れなくてはならない。平和を創造するために、人種差別や偏見をなくすためには、よその国の言語や他民族の文化を理解していかななくてはならない、ということに改めて感じた。

この物語は、「原爆投下は、人類の罪だ」「わたしたち人類は、もう二度と同じあやまちを犯してはいけない」という結論でしめくられている。討論をしていた八人も、討論を聞いていた人たちも、会場にいた人全員がこの意見に納得していた。討論会の勝敗は書かれていない。それはきっと、勝敗など関係なかったからだと思う。この討論会が、平和を創造するための力強い第一歩となる、それだけで良かったからだと思う。

この本を読んで、私自身も戦争に対する見方が変わった。今までは、戦争に勝った国が強く、負けた国は弱いと思っていた。しかし、そうではなかった。戦争に勝ち負けなどない。どちらも負けだったということはこの本が教えてくれた。

これから、好みや意見が異なる人とたくさん出会うかもしれない。そんなときでも、しっかりと相手のことを理解し、受け入れ、少しでも平和な世界に近づけるように努力していきたいと思う。